

上海生活に日本は必要か

● 放眼日中



尖閣諸島をめぐる問題がまだ冷めやらぬ10月下旬、上海へ行ってみたい。既に街は何事もなかったかのように普段通りの様子で、日本人の多い古北エリアでは日本人同士が大きな声で日本語を使い、和食の店には普通に中国人が訪れ、市内の中心部でもユニクロで買い物をする人々が多く見られた。

今回、現地の出版社に勤務する30歳の中国人女性と話す機会があった。有名大学を卒業し、有名出版社に就職、故郷の親もそこそこお金持ちであり、上海で独身生活をエンジョイしている。そんな彼女の第一声は「私の周りに『反日』なんてない。私と同じような環境の友人たちの生活を見て、『日本』が溢れている」という。

彼女は地下鉄の駅のすぐ近くにあるマンションの一室を親の援助で買

い、先月引っ越したばかりだった。テレビはパナソニック、エアコンは日立製作所、冷蔵庫は三洋電機製を買った。家電製品はやはり品質が第一で、長く使える日本ブランド（中国生産）が良いという。ところが、その購入には全て中国の家電量販店のインターネットサイトを利用し、店舗に立ち寄ることすらなかった。日本の家電量販店の中国進出は聞いていたが、日本製品を日本の店で買うとは限らない。中国の家電量販店のサービスは凄まじく、10月1日の国慶節（建国記念日）の祝日にエアコンを取り付けに来てくれたというから驚きだ。彼女は「日本の量販店が進出してきても多分競争に勝てないと思う」と言う。因みに、お金があっても彼女は車は買わない。ガソリン代が高過ぎると駐車場が不足しているからだと割り切っている。

彼女たちのような20〜30歳代の女性には基本的にネットを利用して必要な物を購入するケースが多い。菓子やコーヒーの豆（粉）などもネットで購入しており、その方が安く便利だという。第三者の客観的な評価を確認した上で品物を選び、信頼できる決済システムで代金を支払い、遅くても翌日までにきちんと運ばれる宅配システムは生活を支援する決め手である。これは極めて日本的なサービスだ。

ただ中国の食の安全は、彼女の最近の心配の種である。野菜や牛乳は高くて近くの日系スーパーで信頼できるものを選ぶ。有機栽培にこだわり、牛乳は産地がはっきりしている日本企業製のものを買う。そしてヨーグルトはその牛乳を使い、自らつくる。卵は実家から車で運んで来ることがある。自分の身は自分で守ることが大切だ。そこで役立つのは、やはり日本企業への信頼感だと強調する。

日本企業への信頼、これはまだ損なわれていないようだ。反日運動で一時的に売り上げが落ちる企業もあると思われるが、中国で本当に必要とされている製品は必ず生き残っていくだろう。よく言われることだが、マーケティングと販売方法の問題はかなり大きい。

前出の中国人女性は一見、上海生活をエンジョイしているようだが、話をしているうちに「上海は（変化の）スピードが速過ぎる。仕事に忙し過ぎるから、こだわりたくても全てについては不可能だ」と言い出した。そして「来年はイギリスあたりに留学して、少しスピードを落としたい」とぼつり。上海は日本に近づいてきているのだろうか。



コラムニスト・アジアソウオッチャー
須賀 努

すが・つとむ 東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。